

家庭科教育研究部

【令和元年5月現在】

主任 小田桐 由佳

部員 佐藤 沙織, 菊地 純子, 外崎 祝子

目指す児童の姿

生活の課題を解決する力を身に付け、生活への実践につなげる児童

家庭科における納得解を導く姿を、「生活の課題を解決する力を身に付け、生活への実践につなげる」と設定し、研究に当たる。

I 目指す児童の姿について

1 具体として

(1) 「生活の課題」とは

既習の知識・技能や生活経験を基に生活を見つめることを通して、生活の中から問題を見だし、解決していくために設定するものである。

(2) 「解決する力」とは

既習の知識・技能、生活経験を基にしたり、観察や実験、調査等を協働して行ったりし、課題の解決方法を考える力、観察や実験、調査の結果等について、根拠を明確にして分かりやすく表現する力、他者の思いや考えを聞き、計画・実践等について評価・改善する力である。

(3) 「生活への実践につなげる」とは

課題発見、計画、実践活動、評価・改善という課題を解決する学習過程の中で、生活をよりよくするために自分の生活の中で継続して実践できそうな方法を根拠に基づいて見いだすことである。

II 研究内容について

目指す児童の姿の具現化に向けて、一年次は、以下の二点について研究に取り組む。

1 思考を深める実践活動の設定

課題解決に向けた実践活動の場面では、観察や実験、調査等の実践的・体験的な活動を取り入れ、実感を伴った気付きが得られるようにする。活動を通して、多くの気付きが得られ、活動後の共有場面では、それらの気付きについて共通点や相違点に着目して整理・分類し、根拠を明確にしてよりよい方法を見いだすことができるようにする。根拠に基づいて理由付けを図ることで、思考が深まり、よりよい生活を目指して課題を解決する力が育まれる。また、気付きを広げるだけでなく、思考を深めるために、教師がねらいを明確にして実践的・体験的な活動を組み込んだり、発問を工夫したりする。

2 実践後の振り返り場面の設定

前研究では、振り返りの在り方が課題として明らかとなったため、ねらいに沿って振り返りの時期や方法、内容を工夫する。具体的には、実践後の振り返りの場面では、発表して終わるのではなく、「なぜその方法にしたのか」など聞き合う活動を取り入れ、よいところや改善点を交換し合うようにする。よいところを認められることで家庭実践への意欲が高まったり、アドバイス

を基に具体的に改善策を考えたりし、生活をよりよくしようと主体的に取り組めるようになる。

また、自己評価や相互評価を取り入れ、達成状況を可視化できるようにし、よさやスキルアップを実感させ、自分の成長を具体的に捉えられるようにする。自分の成長を自覚させることで「できるようになったことをやってみよう」「もっとできるようになりたい」という思いを高めさせ、生活への実践につながるようにする。さらに、どの場面で実践できそうか具体的に考えさせ、より自分の生活に即した方法を見いだせるようにする。

Ⅲ 研究・検証方法について

研究内容が有効であるか、以下の方法で検証する。

- 1 思考を深める実践活動、実践後の振り返り場面を設定する。
- 2 ノートやワークシートへの振り返りの記述から児童の変容や学習の定着を見取り、分析する。

【参考文献】

文部科学省『初等教育資料』8月号,12月号,東洋館出版社,2017

鈴木明子『小学校新学習指導要領ポイント総整理 家庭』東洋館出版社,2017